

技術者から農家へ
感謝に満ちた百年の歩み

私は熊本工業高校の出身で、当時、技術者は貴重な存在でした。

卒業後、日立製作所に就職し、朝鮮半島に渡りました。そこで「ホウ砂」などの、当時最先端の薬品製造に携わりました。

しかし、ほどなくして戦争が始まり、私は日本に呼び戻され、静岡の三方ヶ原で飛行機の整備兵として徴兵されました。

どうにか終戦を迎えたものの、一人息子のいところが戦死。代々農家だった小路家の跡取りがいなくなっ

てしまいました。そこで、私が養子として迎えらるることになりました。日立からはエンジニアとして声がかかっていましたし、高校、就職と私を支えてくれた母も大いに反対しました。

しかし、当時は家を守ることが何よりも重要で、また周囲から「家を継がない」と思われたことへの反骨

猛さんの還暦を記念して、今は亡き妻の和子さんと一緒に出雲大社を参拝した時の写真。夫婦として半世紀近くを共に歩んできた二人ですが、「心新たに、夫婦の絆を深めたい」と縁結びの神様に変わらぬ愛を誓い合ったそうです。

こうじ たけし
小路猛さん (100歳)

大正14年8月30日生まれ



精神から、「立派な農家になってやる」と決意し、小路家に入りました。その後は、農業に没頭する日々が始まりました。

あの頃は、誰よりも田んぼを耕していたと自負しております。おいしい米を作り続けていたところ、なんとその下陳の米が「皇室献上米」に選ばれました。仲間の農家や町長と共に、賢所(宮中の神殿)に献上に伺ったことをよく覚えております。

その後は、農協の副会長を経て、町議会議員を12年間勤めました。在任中町文化会館の建設工事があり、ホールをゆつたりと座れる空間にするために、役場の皆さんと意見を出

し合った当時を思い出しますね。

私の父も97歳まで生きましたが、口癖のように言っていたのが「反省は大事だが、愚痴をこぼしたり、くよくよするな。人の悪口を言うな、人を嫌えば人に嫌われる」。この教えは今でもしっかり守っております。

そのおかげで、多くの仲間にも恵まれ、今でもこうして元気に畑仕事にもいそしんでおられます。

私の百年は振り返ると感謝ばかり。皆さんへの感謝、町への感謝、世の中への感謝。家族にも先祖にも感謝。今まで多くの役職を担ってきましたが、それを文句一つ言わずに支えてくれた妻にも、心から感謝です。

昭和と同じ年を重ねて百年。
振り返ると、感謝ばかりです。

益城の昭和 未来へつなぐのは人

「益城の昭和100年」を巡る取材の中で、私たちは各地で昭和の面影を探しました。

当初、昭和の象徴を形あるものに求めましたが、熊本地震という未曾有の災害が、多くの民家や貴重な遺産を奪い去っていました。

しかし、益城の宝は形あるものだけではありません。地域に根差し、たくましく生きる「人々」そのもの。彼らが紡ぐ記憶、受け継ぐ伝統や技術こそ、昭和の遺産を未来へつなぐ、かけがえのない力です。

時は令和。世界が急速に変化していく中、それらもまた、語り継がなければ、やがて風化してしまうでしょう。

益城の昭和をさらに百年先へとつなぐために、私たちは今一度、先人たちが生きた時代に目を向けるべきなのかもしれません。

